



関西大学

# 大阪都市遺産研究センター

## Newsletter

No. 8 2013年3月15日

### 目次

大阪都市遺産フォーラム「道頓堀今昔—芝居画家 山田伸吉の世界—」	1
特別企画展「道頓堀今昔—芝居画家 山田伸吉の世界—」	2
新なにわ塾第5弾「大阪と映画文化を考える」	2
ミュージアム講座「なにわの文化遺産」	3
可視化プロジェクト「水都大阪の景観変遷」	4

## 大阪都市遺産フォーラム「道頓堀今昔—芝居画家 山田伸吉の世界—」

第4回大阪都市遺産フォーラム「道頓堀今昔—芝居画家 山田伸吉の世界—」が2012年12月8日に開催された。第1部「芝居画家 山田伸吉の世界」と第2部「道頓堀今昔—道頓堀の明日を語る—」にわかれて研究発表やパネルディスカッションが行われた。

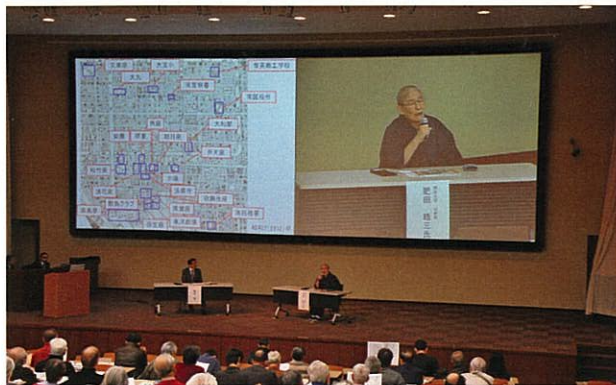
調査報告「山田伸吉の生涯と画業」では、長谷洋一研究員（関西大学文学部教授）が従来の山田伸吉についての研究には誤りがあったことを指摘し、史料を示して山田の生年などを確定させた。また、山田は松竹座のポスターや雑誌のデザインだけではなく、油絵や芝居絵を描いていたことも紹介した。

肥田皓三氏（関西大学元教授 / 大阪芸能懇話会主宰）と藪田貫センター長（関西大学文学部教授）の対談「山田伸吉と松竹座」は、戦前から戦後の地図や写真を映しながら進められた。肥田氏は島之内で生まれ育ち、幼い

ころから道頓堀に通っていた。肥田氏は生前の山田伸吉と親交があり、故人との思い出を織り交ぜながら語った。

第二部の松本茂章氏（静岡文化芸術大学教授）による基調講演「90周年を迎えたOSK日本歌劇団の意義と課題—文化政策研究の視点から—」では、OSKに所属していた飛鳥明子などの貴重な写真が示された。東條薫と山田伸吉の写真も映され、二人の逸話も披露された。

続いて行われたパネルディスカッション「道頓堀の明日を語る」では、パネリストとして吉里忠史氏（道頓堀浮世小路復元プロジェクトチームリーダー）、永尾俊一氏（道頓堀商店会副会長）、松本茂章氏、長谷洋一研究員が壇上に上がった。コーディネーターは高橋隆博研究員（関西大学文学部教授）が務めた。パネリストは、現在の道頓堀が抱える問題点を挙げ、これからの道頓堀について白熱した議論を交わした。構想中の道頓堀プー



ルの紹介や、新たに名所を作る案が多数あった。参加者は151名だった。

フォーラム終了後には、博物館で長谷研究員による

展示解説があった。フォーラム終了後の解説であったため、参加者は熱心に耳を傾けていた。

(R.A. 相良 真理子)

## 特別企画展「道頓堀今昔－芝居画家 山田伸吉の世界－」

第4回大阪都市遺産フォーラムの関連行事として、2012年12月1日から19日に関西大学博物館第2展示室において、特別企画展「道頓堀今昔－芝居画家 山田伸吉の世界－」が開催された。山田伸吉は、大正末期から昭和初期にかけて大阪松竹宣伝部に所属し、映画・舞台のポスターや「SHOCHIKUZA NEWS」の表紙などを手がけたほか、舞台背景（書割）のデザインにも携わり、戦後は「芝居画家」として活躍した人物である。

センターでは、2010年に山田伸吉画「道頓堀今昔」「住吉大社夏祭り」のご寄贈を受けたことを契機として関係資料を収集し、調査を進めてきた。今回の展覧会は、その成果にもとづき、センター所蔵資料だけではなく、関西大学総合図書館の所蔵品を含めた計257点のほか、特別展示として肥田皓三氏所蔵の松竹座関係のパンフレット類や、天牛書店所蔵の山田伸吉が昭和46年の「天牛新一郎翁を讃える会」で天牛氏に贈った油彩画「天牛新一郎氏肖像」が出品された。

展覧会では、大阪松竹宣伝部に所属していた頃の舞台背景画デッサンなど若き日の作品から、30代後半に洋画家を目指していた頃を経て、60代を前に「芝居絵」という独自の境地に達するまでの足跡が彼の作品を通し

て辿れるような構成で、これまで知られていたとは異なる山田伸吉の新たな世界を紹介するものであった。そのほかには、芝居画展の際の寄書色紙、片岡仁左衛門や渋谷天外などから送られた葉書や山田伸吉作成の年賀状など、彼の多彩な交友関係と人柄を偲ぶ資料も展示された。また、展示室の壁面には、山田伸吉の活躍の場であった道頓堀の風景をコンピュータグラフィックスで再現した映像も上映された。

当初は、12月1日～15日の会期を予定していたが、19日まで延長し、師走の慌ただしい時期ではあったが、入館者数は860名を数えた。山田伸吉にゆかりの方々にご覧いただくことができただけでなく、入館者からは貴重な情報提供をいただくこともあり、今回の展覧会は、今後さらに山田伸吉の調査を進め、かつてはエンターテインメントの町であった道頓堀の研究を深めるきっかけとなるものであった。

特別企画展の開催にあたりまして、ご協力いただきました方々にこの場を借りて厚く御礼を申し上げます。

(特別任用研究員 櫻木 潤)



## 新なにわ塾第5弾「大阪と映画文化を考える」

新なにわ塾第5弾「大阪と映画文化を考える」が、大阪府立大学観光産業戦略研究所と大阪府、関西大学大阪都市遺産研究センターの共催で行なわれた。

平成24年9月27日から12月7日に開講された6

回の講演は、映画監督、喜劇俳優、研究者、学芸員など各分野の専門家を招き、あらゆる角度から大阪の映画文化に迫るものであった。

当センターからは、映画史・映画美術を専門とする笹



川慶子研究員（関西大学文学部准教授）と日本近現代文学を専門とする増田周子研究員（関西大学文学部教授）が招かれ講演を行った。

笹川慶子研究員は第1講「大阪の映画製作」で、かつて大阪に存在した帝国キネマ演芸、通称帝キネに焦点をあて、大正末期から昭和初期大阪の映画製作の歴史を、帝キネ映画の上映とともに振り返った。また、第2講「大



阪の映画館とその記憶」では、戦前から戦後にかけて大阪の映画館で映画を見ていた方々のインタビュー映像を紹介し、映画と大阪のかかわりや都市の変容と映画文化の関係を紐解いた。

一方、増田周子研究員は、第4講「大阪の小説家と映画」で、谷崎潤一郎「春琴抄」、山崎豊子「ぼんち」、宮本輝「泥の河」など、「大阪」とゆかりの深い作品の映画化について、文学研究者の観点から解説した。その中で、映画『暖簾』に、八田吾平を演じた森繁久弥が自身の出身校である北野高校の校歌を口ずさんでいる、という場面があることも紹介した。大阪に育ち、北野高校で学んだ増田周子研究員であるからこそ気付いたピソードであり、小説と映画に表現された「大阪」をより身近に感じる機会となったであろう。

(R.A. 岩田 陽子)

## ミュージアム講座「なにわの文化遺産」

関西大学ミュージアム講座は、関西大学博物館と社会連携部との共催行事として、「なにわの文化遺産」をテーマとし、年に一度開催している。平成24年度は「文化遺産を味わう」をテーマに行われた。

第一回(10月17日)の講座において、フランチスカ・エームケ研究員(ドイツ・ケルン大学名誉教授)は「絵巻」について話した。絵巻は絵巻物ともいい、横長に展開する巻物に描いた絵画作品の総称である。絵巻「熙代勝覧」はベルリン東洋美術館の賛助会員であるキュスター氏が転居する際に偶然に発見したものである。エームケ氏は今川橋から日本橋までの江戸大通りの様子を描いた「熙代勝覧(きだいしょうらん)」に注目し、文化年間多くの情報を再現したこの絵巻物は「江戸小辞典」であると評価した。



第二回(10月24日)の講座では、高橋隆博研究員(関西大学文学部教授)が「やきもの」を題目に講演を行った。私たちの日々の暮らしには、茶碗や皿を始めとして実にさまざまなやきものが使われており、それらは私たちにみずみずしい現実感や豊潤な精神空間を感じさせてくれる。高橋氏は東洋のやきものの歴史をたどるとともに文様の背景などについて、その成立を探った。講演後、本学博物館で所蔵された陶磁器の優品についても解説を実施した。

第三回(10月31日)の講座では、長谷洋一研究員(関西大学文学部教授)は「神像」について語った。神様をかたちどった彫刻を神像と呼ぶが、こんにち、仏像の世界はよく知られているが、神像はほとんど人目に触れないこともあってあまり知られていない。長谷研究員は最



近発見したいくつかの神像を解説しながら、神と仏が共存した状況をふりかえり、神像の造形の美や日本古来の信仰基盤について紹介した。

(R.A. 王 海)



## 可視化プロジェクト「水都大阪の景観変遷」

大阪都市遺産研究センターでは、都市「大阪」の景観変遷の検証の一環として、地形図をもとにした「水都大阪」の変遷を可視化する作業を進めている。

近世の大坂は「浪華の八百八橋」といわれ、実に多くの河川や堀川が物資を運ぶ交通路として「水都大阪」の暮らしを支えていた。また堀川は、経済活動のみならず、天神祭の船渡御や、道頓堀の歌舞伎役者の船乗り込みなど、文化的にも大きな役割を果たしていた。しかし明治以降、都市の近代化にともなって交通手段が鉄道や自動

車に代わり、大阪における暮らしや祭礼、伝統文化など「水都大阪」の景観は大きく変化した。

このたび大阪都市遺産研究センターでは、ホームページにて「水都大阪の景観変遷」に関する可視化研究の公開を開始した。地形図をもとに、1880年頃・1930年頃・1960年頃の3期にわたり、交通機関と市街地の変遷を視覚的に表現した地図を見ることができる。

現在、景観変遷を公開している地域は、大阪市の北部エリア・中部エリア・南部エリアの3つである。北部では大阪駅を中心とする鉄道と新淀川の改修、中部では大阪城から船場にかけての旧市街地、いわゆる大坂三郷の交通機関の近代化、南部では難波・天王寺から住吉までの地域で大阪市域の拡張と、それともなう市街地化の進展が、それぞれ近代大阪の景観変遷に大きく関与していることが見て取れる内容となっている。

地形図をもとにした都市景観の変遷の可視化プロジェクトは、今後も順次内容を充実させつつホームページで公開される予定となっている。

(特別任用研究員 内田 吉哉)



### ※訂正とお詫び

2012年10月30日に発行いたしました「関西大学大阪都市遺産研究センター NewsLetter No.7」におきまして、記載に誤りがありました。正しくは以下の通りです。読者の皆様ならびに関係者の皆様にご迷惑をおかけしましたことをお詫びするとともに、ここに訂正させていただきます。

「関西大学大阪都市遺産研究センター NewsLetter No.7」1ページ、目次・記事タイトル部分

(誤) 第4回大阪都市遺産フォーラム「大阪の都市遺産と住友」

(正) 地域連携事業 フォーラム「大阪の都市遺産と住友」

## 関西大学大阪都市遺産研究センター NewsLetter No.8 2013年3月15日発行

発行・編集 関西大学大阪都市遺産研究センター

〒564-8680 大阪府吹田市山手町3-3-35 関西大学博物館内

TEL 06-6368-0095 FAX 06-6368-0092

<http://www.kansai-u.ac.jp/Museum/osaka-toshi/>

mail [osaka-toshi@ml.kandai.jp](mailto:osaka-toshi@ml.kandai.jp)

